



ふれあい

発行所：鳥取県人権教育推進協議会（県人教）
〒680-0846 鳥取市扇町21 県立人権ひろば21ふらっと内
電話：0857(22)0578 FAX：0857(22)0593
発行者 岡崎周治
HP：<http://torikenjinkyou.sakura.ne.jp/>

速報！

「大会の灯火
を途切れさせ
ては・・・」

熊本県の思いを受け、大阪の地で

「第68回全国人権・同和教育研究大会」開催！！

4月に起きた熊本地震の影響で、全人教大会の熊本県での開催が断念されました。「それでも全人教大会の灯火を途切れさせてはならない」と全人教事務局が会場確保に奔走し、大阪での開催にこぎつけました。例年ある開会行事・全体会はなく、分科会のみで開催となりましたが、全国からの参加者の熱で、なにわの街は沸きました。

11月26日(土)・27日(日)、全国から7000名が参加し、大阪市内21会場で第68回全国人権・同和教育研究大会が開催されました。



超満員の第4分科会会場

[大会宣言]より

2016年4月 九州熊本の大地が大きく揺れた 天災は見えなかった差別を表出させたという困難の中にあってもたじろがず 部落の子を中軸にすえた人権・同和教育は また新たな始まりを迎えた この熊本のなかまの思いに心を寄せ 私たちはここ大阪に集った

格差が拡大し、貧困が連鎖している むき出しの憎悪と敵意がばらまかれ 不寛容な空気が人々を分断している 弱者の悲鳴にも似た声が聞こえる社会 一方で 自由と平和を希求する若者たちの声が 共感とともに広がりつつある インクルーシブをめざす法のもと 人権と福祉のまちづくりがすすめられている かけがえのない私が ありのままに生きていける 誰にも排除されず 互いに支え、支えられている それがあたりまえであるために

私たちは 脈々となつないできた研究大会のあゆみを 途絶えさせてはならない さまざまな「であい」をつくりだし 「差別の現実から深く学ぶ」人権・同和教育を さらに一歩前へ

※宣言中にある「天災は見えなかった差別を表出させた」の言葉を鳥取県中部地震にも当てはめて考えてみたいものです

全人教大会で鳥取県中部地震に対して義援金を700,883円いただきました。全国の仲間へ感謝です

{ 鳥取県からの報告 その1 }

鳥取県の報告があった関西大学千里山学舎は、阪急千里線沿いの丘陵地にあり、駅から校舎まで長〜いエスカレーターでつながっています。のどかなキャンパス周辺とは打って変わり、会場内は収容予定人数を大幅に超え、補助の椅子を出しても足りないほどの超満員で、熱気に溢れていました。

第4分科会 <人権確立をめざすまちづくり>では、8月の鳥取県研究集会で発表された澤田真美さん、大柄瑞穂さんの2名が報告されました。今回は澤田さんの報告を掲載します。



<第4分科会 第2分散会>



★「小学生から100歳まで 誰もがすみやすいまちをめざして！」

～大山町人権・同和問題小地域懇談会の取り組みを中心に～

大山町人権・同和教育推進協議会 澤田 真美 さん

< 報告概要 > 澤田さんは、これまで40年以上続けられた啓発や小地域懇談会の成果を認めながらも、依然として残る差別事象等から、課題を「啓発内容の画一性」と捉え、10年前から「対話」にこだわる「参加型学習」を積極的に取り入れた実践を積み重ねていけます。

参加型学習推進者300人の事前研修と振り返りを「PDCAの手法」(plan-do-check-actの略。多くの分野で用いられる経営手法の一つ)を用いて検証しながら、参加型学習をやり多きものへと高めていけます。この結果、対話による合意形成と主体的学びに高い満足感があるとのアンケート結果が増え、主催者に責任を求める記述から「今度は誘ってきます」などの主体的記述が増えてきた、とその成果にしっかりとした手ごたえを感じておられました。

また、「同和問題が薄くなったのでは」という町民の声に対しては、「今まで何十年と直球ばかり投げてきたボールを変化球にしているだけ。人権の学びは苦手、難しいなどのマイナスからの脱却が必要。」と力強く語られ、「大人の学びは強制的に集めてできるものではありません。多様な学習スタイルの提供や学びの支援が一層必要です。」とも。「『つながり』『安心できる場』『対話』『自己有用感』をキーワードに今以上に人権が大切にされるまちづくりをすすめていきたい。」と決意を報告されました。

< 質疑・協議 >

質問： ・協力者について ・小地域懇の内容 ・参加者を増やす工夫は？
・他にどんな参加体験型のプログラムがあるか？ 等

会場意見： 「小地域懇の中で、推進者と参加者とがうまくかみ合わないなど、マイナス面が浮き彫りになった。現在は小地域懇自体をやめ、他の方法で啓発している。」

報告者： 「ご意見ありがとうございます。小地域懇では、住民の困りごとや生活に密着していることについて対話し、人権の学びは楽しいと思っていただきたい。だから限界集落にも、待ってくれる人があるので行っています。費用対効果では表せないものがあります。大山町は小地域懇談会はやめたくありません。」「参加型学習は対等で安心できる学びです。大山町のワークショップに参加してみてください。」

会場の意見に「ありがとうございます」と丁寧に応え、「参加型学習」を単なる流行としてではなく、町の実態に合わせ、より住民の生活や気持ちに根ざしたものと工夫改善してきた大山町の取り組みについて熱く語られる澤田さんに対して、会場から大きな拍手が起きました。

報告!

「第9回 中国ブロック人権・同和教育研究集会」開催

～ つながろう仲間、中国5県の人権・同和教育の更なる推進を ～

2016年10月8日土曜日、山口市小郡ふれあいセンターにおいて、中国ブロック人権・同和教育研究協議会連絡会主催の「第9回中国ブロック人権・同和教育研究集会」が開催され、中国地方5県から集まった約60名の参加者が、熱心に討議を重ねました。

鳥取県人教からは、米子市宇田川保育園の井上道さんが、分科会Bで報告されました。「物事の本質」を捉える力の素地作りを「ツマグロヒョウモン」との出会いをとおして実践していかれた報告で、会場からの「自分もぜひ実践してみたい」という、熱心な質問と重なり合いました。

以下は当日の報告の概要です。



< 報告概要 >

「きらっと輝く瞬間をみつめて」

米子市 宇田川保育園 井上道さん

1 はじめに

人権保育を進める中で、子どもたちに「物事の本質を見ようとする」「物事を多面的に見る」力をつける素地づくりを行いたいという視点を定め、実践に取り組んでいる。

2 取り組みについて



保育の中で大切にしている取り組みの一つとして、卵→幼虫→さなぎ→成虫と姿を変えるテントウムシやチョウの観察があります。これは、物事はずっと同質ではないことを表しており、社会を見つめていくうえでも必要なこと。

人間でいうと、現在、友だちとのトラブルが絶えない子どもが、大人になるまで同じとは限りません。しかし、人に対する印象というもの、なかなか変わらないものです。本人は変わろうと努力しても、それをまわりの人間の決め付けた心が、許さない現実があります。相手のことを知ろうとしない現実があります。

テントウムシやチョウは、幼虫のときの見た目は気持ち悪いけど、成虫はかわいくてきれいになります。この過程を見つめていくことは「〇ちゃんは、前はこうだったけど、今はすごくがんばっているよね」と、子どもたちの思考の中で、物事っていうのは同じままで進んでいくのではない、変化していくという見方につながると考えています。ただの虫探し、ただ虫を飼うことで終わるのではなく、普段は見ようとも知ろうともしない部分をみつめ、子どもたちと共に様々なことを感じていきたいと思っています。（「3 ツマグロヒョウモンとの出会い」以下は次号に掲載予定です）

※なお、詳細は『2016年度人権問題学習その実践 No.25』（2017年3月発行）にも掲載予定です。

鳥取県研究集会『記録集』を発送しました

8月5日に行った、県の研究集会『記録集』を、11月中旬にメール便又は各加盟人・同推協を通じて、配送しました。落丁・乱丁、まだ記録集が届かないなどの点がありましたら県人教事務局までご連絡ください。TEL 0857-22-0578

第41回人権尊重社会を実現する鳥取県研究集会 2017年8月3日(木)

決定!

倉吉市を中心に開催予定

「人権サークル」訪問

継続は力なり 継続は宝なり

27年間、毎月続けた人権教育サークル『トラの穴』

10月13日木曜日午後7時過ぎ、静かだった会場周辺が急に車であふれ出します。仕事場から駆けつけた小学校・高等学校の先生、保育士さん・・・中には小さな子どもさん連れの参加者もあります。

ここは、米子市内の隣保館。人権教育サークル『トラの穴』の月1回の定例会場です。この日は10数名の参加者があり、保育所の「革とふれあい細工する子どもたち」の報告に加え、事務局の森悟さんが用意された「新聞に掲載されていた人権に関する記事」のまわし読み等の演習もあり、和やかな中にも、緊張感漂う90分間でした。



トラの穴は毎月第2木曜日の19時30分から開催されています。その始まりなどを、代表の福原潤一さんにお聞きしました。「始まりは1989年の1月。もとは部落解放同盟米子市協議会の青年部学習会として、解放新聞の読み合わせを中心に行っていました。しかし、次第に教員の参加者が多くなり、数年後には人権教育サークルとして活動するようになりました。長い活動の中で、参加するメンバーもいろいろ変わりましたが、一度も中断することなく続いています。時には、代表の私と事務局の森さんの二人だけの時もありましたが、二人いれば活動はできる。無理しないことを第一に続けていこう！と励まし合ってここまでできました。」としみじみ語っておられました。

また、会報誌『トラのこえ』を発行しておられる森さんは「27年間、毎月欠けることなく続けてきた活動ですから、会報もかなりの量になりました。私たちの活動は本当にささやかなもので、まさに蟻の一步です。しかし、大河の一滴だという自負もあります。」と語っておられました。謙虚さの中にも、部落解放・人権確立への確固とした信念を感じるひと時でした。

追伸 中国ブロックで報告された井上道さんもこのサークルに参加しておられます。